

話しことばに現れる世代差—縮約形—

中 島 悦 子

1. はじめに

言語表現を改まった表現（フォーマル・スタイル）とくだけた表現（インフォーマル・スタイル）という観点から見た場合、前者は書きことばに、後者は話しことばに用いられるのが普通である。しかし、話しことばにおいても、あらたまりの程度（あらたまり度と呼ぶ）の強弱に応じて段階があり、一対多の講演等を使用される表現はフォーマルに、親しい間での談話はインフォーマルにほぼ対応する。小論で問題にする縮約形は一般にインフォーマルな話しことばに多く使用されると言われる。つまり、ある談話においてあらたまり度が弱ければ弱い程縮約形が多く出現するのではないかという仮説が考えられる。そこで、小論では縮約形をあらたまり度を計る尺度と捉え、S家とN家の三世代の発話中における縮約形の現れ方を観察することによって次の点を明らかにすることを目的とする。

- (1) 縮約形の現れ方の実態とその類型化
- (2) 縮約形の現れ方と世代差
- (3) 縮約形の現れ方とあらたまり度との関連性

調査対象としては、資料「女性のことばと世代」における鈴木さん一家（S家）における祖母（K 82歳）、母（C 53歳）、娘（M 20歳）と内藤さん一家（N家）における曾祖母（Y 89歳）・祖母（H 66歳）、父（N 49歳）・母（U 45歳）、娘（A 21歳）の老年、中年、若年の三世代および司会（S 40歳）のことばに限定した。

調査方法としては、S家・N家の会話資料に現れた実際の縮約形と非縮約形（もとの形）の使用回数をS家、N家ごとに採取し、分析した。

2. 縮約形の現れ方の実態とその類型化

S家・N家の会話資料に現れた実際の縮約形を語形別に類型化して示すと次の〈表1〉のようになる。

<表1>

	もとの形	縮約形
A 母音の縮約化	A1 -テイル (teiru)	-テル (teru)
	A2 -テオク (teoku)	-トク (toku)
B 母音+子音の縮約化	B1 ケド (keredo)	ケド (kedo)
C 促音化	C1 -トイウ (toiū)	-ッテイウ (tteiū)
	C2 -トイウ (toiū)	-ッテ (tte)
	C3 -トオモウ (to omou)	-ッテオモウ (tte omou)
	C4 -テモ (temo)	-タッテ (tatte)
	C5 ヤハリ (yahari)	ヤッパリ (yappari)
	C5 ヤハリ (yahari)	ヤッパシ (yappashi)
D 撥音化	C6 バカリ (bakari)	バッカリ (bakkari).
	D1 -ノダ (noda)	-ンダ (nda)
	D2 -モノダ (monoda)	-モンダ (monda)
	D3 N/N	N/N
	D4 ノデ (node)	ンデ (nde)
	D5 ワカランナイ (wakananai)	ワカンナイ (wakannai)
	D6 テルノ (teruno)	テンノ (tenno)
	D7 ナド (nado)	ナンカ (nanka)
	D8 ナニカ (nanika)	ナンカ (nanka)
	D9 オナジ (onaji)	オンナジ (onnaji)
D10 アマリ (amari)	アンマリ (anmari)	
E 拗音化	E1 -テシマウ (tesimau)	-チャウ (tʃau)
	E2 -テワ (dewa)	-ジャ (dʒa)
	E3 -テワ (tewa)	-チャ (tʃa)
	E4 -ナケレバ (nakereba)	-ナキヤ (nakja)
	E5 -レバ (reba)	-リヤ (rja)
	E6 ア(コ)レハ (arewa)	ア(コ)リヤ (aria)
	E7 アタシハ (atašija)	アタシヤ (atašja)
F 短音化	F1 デショウ (deshoo)	デショ (desho)

<表1>に示した縮約形の類型化、<縮約化><促音化><撥音化><拗音化><短音化>を以下に考察する(S・N家全体の比率は司会者をも含む)。

小論にいう<縮約化>とは、A、Bのような母音あるいは母音+子音の脱落した音形を指す。A1《テイル→テル》への縮約率はS家全体で87%、N家では92%である。A2《テオク→トク》への縮約は、S家では使用が0、N家でも「テオク」が1例、「トク」が4例と使用数が少ないため言及しない。B1の《ケレド(モ)→ケド(モ)》への縮約率はS家では73%、N家では84%となる。実例を挙げる。

(1) A1・B1 自分じゃ区別してるの わかんないけど (097K02)

<促音化>とはC1、C3のように引用の助詞「ト」が促音化して「ッテ」となる「ッテイウ」「ッテオモウ」の形式、C2の「トイウ」全体が促音化して「ッテ」となる形式、C4の逆説の「テモ」が「タッテ」になる形式等をいう。また、促音/Q/挿入の「ヤッパリ」「バッカリ」も一応ここに分類する。促音化の中では、「トイウ→ッテイウ」への促音化率がS家88%、N家92%と一番高く、次いで「トイウ→ッテ」への促音化率がS家82%、N家92%と続く。「ト思ウ→ッテ思ウ」への促音化率はS家6%、N家7%と極めて低い。引用を表す「ト」が「ッテ」となる率は「言ウ」「思ウ」等の「情報処理」を表す動詞のうち、「言ウ」等の言語活動動詞に続く場合に最も高くなる。促音化の例を挙げると、次のようなものである。

(2) C1・2 何回も注意ってか そういう言葉づかいっていう感じ…(262M01)

(3) C3 …おとなしそうでいいんじゃないかなっておもうけど (584C01)

(4) C5 都留市だから やっぱり 大月でおりるですか (036Y01)

(5) C6 男は外語で そういうれんじゅうばっかりで そだちましたけど (147K03)

C2の「ッテ」に関しては種々の問題がある。例えば、提題を表す「ッテ」のうち「トイウノハ」の縮約と考えられる次の例(6)は採取する。即ち、「言葉ッテ」は、(1)「言葉トイウノハ」→(2)「言葉ッテイウノハ」→(3)「言葉ッテノハ」→(4)「言葉ッテ」の順で縮約化・促音化がなされている。つまり縮

約化の最終段階の「ッテ」は最もあらたまり度が弱いことになる。

(6) C2 …言葉って わりと むずかしいっていえば (318C01)

次の終助詞的な「ッテ」は「トイウ」の縮約とは想定できず採録しない。

(7) あのこのヨコマチっていうとこでね うまれたですってよ あたしは
(186Y02)

また、例えば次の「ドッチカッタラ」の「ッたら」は、「ドッチカトイッ
たら」→「ドッチカッテイッたら」→「ドッチカッテッたら」→「ドッチカ
ッたら」という段階での縮約化・促音化が想定されるが、S家のMに2例あ
るだけなので、対象からはずす。

(8) ノりにいちゃんも どっちかったら 男らしいってより なんかなよっ
とっとか そういう (479M01)

<撥音化>にはナ行音の撥音化とラ行音の撥音化等がある。また、撥音
／N／の挿入による「オンナジ」「アンマリ」等もここに分類しておく。

ナ行音の撥音化の中では、D1の文末詞の《ノダ→ンダ》への撥音化率がS
家全体で100%、N家で99.7%と最も高い。話し言葉では文末詞「ノダ」の
「ンダ」への定着が顕著なことが知られる。

D2の《モノ(ダ)→モン(ダ)》は三つに分類できる。一つは「ノダ」と同
様、「ダ」の前に立ち、文の内容に対する話者の心的態度を表出する文末詞
の「モノダ」である奥津(1974)。文末詞の「モンダ」への撥音化率はS家
89%、N家86%となっている。二つめは理由を表す形式副詞の「モノダ」で
ある奥津(1986)。形式副詞の「モンダ」への撥音化率はS家29%、N家94%
と、両家ではかなりの差がある。三つめは形式名詞の「モノ」である。形式
名詞の「モン」への撥音化率はS家では20%、N家では25%とあまり高くない。
つまり、「モノ」から「モン」への撥音化の定着度は文末詞が最も高く、
形式副詞や形式名詞はあまり定着していないと言える。D1、D2の用例を掲げ
ておく。

(9) D1 満州で うまれたんです。(043K01)

(10) D2 やっぱり 言葉の使い方って 難しいもんんですよねえ (794Y01)

D2 ほいだもんだから 気が若いわけ (691Y01)

D2 …ズボンだとか あのこういう着るもんだとか… (441Y05)

D3の《NノN→NンN》の撥音化については、すべての「ノ」が「ン」となるわけではない。例えば、(10)の「言葉の使いかた」における「ノ」は撥音化しない。しかし、次の(11)のように、「ノ」の後接する被修飾名詞が「時」「頃」「ところ」等のように時や場所を表す名詞の場合には撥音化が起こり易い。

(11) D3 そうねえ 昔 子供んときのよび名だわね (109C01)

奥津(1978)、益岡他(1989)が指摘するように、(11)の「ノ」は連体の助詞ではなく、判定詞「ダ」の連体形と考えたい。「ダ」は「d-a」と分析されるが「ノ」も「n-o」と分析できる。「ノ」から「ン」への撥音化は、「n-o」の「-o」が脱落した音韻現象であると説明できる。つまり、(11)のように「ダ」の連体形の「ノ」は「ン」への撥音化が起こり易いが、(10)の連体助詞の「ノ」は撥音化が起こりにくいと言える。「ダ」の連体形と考えられる「NノN→NンN」への撥音化率は、S家28%、N家19%とあまり高くない。

また、D4の理由の接続助詞「ノデ→ンデ」への撥音化はN家のみで、その撥音化率も24%と高くない。しかし、撥音/Q/の挿入した「ヤハリ→ヤッパリ」は、S家では96%、N家では92%と高く、「バカリ→パッカリ」もS家、N家共実例数は少ないが、その率は100%、90%と高い。例を挙げておく。

(12) D4 ただこの子からみると ひいおばあちゃんんで 両方つかいわける (588N01)

ラ行音の撥音化率はD5《ワカラナイ→ワカンナイ》においては、S家で45%、N家で71%と、N家の方が高い。D6の《テルノ→テンノ》への撥音化はN家のみ69%あり、<表1>に一応挙げておく。また《～ニナル→～ンナル》への撥音化はS、N家共数が少なく、対象からはずす。ラ行音の撥音化の例を挙げる。

- (13) D5 なん・なぜだかわかんないけど やっぱり (441M02)
- (14) D6 だからね ほかの人がね よく望月さん 鉄道まわってなに
あるいてんの 名刺でもなんでも (451Y01)

「拗音化」については、E2《デワ→ジャ》が、S、N家共100%、E3《テフ→チャ》がS家100%、N家が90%と拗音化率が高く、定着している。次いで、E1の《テシマウ→チャウ》がS家82%、N家98%、E4《ナケレバ→ナキャ》がS家63%、N家92%と拗音化が高くなる。E5《レバ→リャ》はS家10%、N家33%と高くない。

- (15) E1 おにいさんに なっちゃってるからね (480K01)
- (16) E2・E4 …今の世の中ってわけじゃないけどお おんなじ おんなじ場
で男の子とも意見をかわしていかなきゃなんないと
… (396M01)

- (17) E3 まあ お年とかあまり普段おっしゃらないようなことも うかがわ
なくちゃならないとおもうんですけど (002S03)
- (18) E5 あたしなんかでも これとこれとって いわれりゃ こっちがいい
わ (345K02)

「短音化」のF1《デショウ→デショ》はS家45%、N家76%となっ
ている。

- (19) F1 普通 わたしたちだと どうこれ すてきでしょとかね (363C04)

3. 縮約形の現れ方と世代差

<表2-1>はS家の[K][M][C]の三世代および[S]、<表2-2>
はN家の[Y・H][N・U][A]の三世代および[S]の発話中の縮約形の使
用頻度である。

<表2-1><表2-2>に示したS家、N家の老・中・若の三世代の縮
約形の現れ方を縮約率の高いものを対象とし、類型別に分析する（「老」と
はS家のK、N家のY・H、「中」とはS家のC、N家のN・U、「若」とは
S家のM、N家のAを指す）。

<表2-1> : [S家]

	K		C		M		S		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
A1 テイル	0	0	6	18	4	13	5	25	15	13
テル	32	100	27	82	26	87	15	75	100	87
B1 ケレド(モ)	1	4	17	25	3	9	24	62	45	27
ケド(モ)	23	96	51	75	32	91	15	38	121	73
C1 トイウ	2	5	5	6	1	2	22	31	29	12
ッテイウ	36	95	84	94	54	98	49	69	223	88
C2 トイウ	1	6	0	0	1	4	13	57	15	18
ッテ	16	94	21	100	23	96	10	43	70	82
C3 トオモウ	13	100	17	88	7	100	13	93	50	94
ッテオモウ	0	0	2	12	0	0	1	7	3	6
C4 テモ	2	40	5	83	3	100	5	100	15	79
タッテ	3	60	1	17	0	0	0	0	4	21
C5 ヤハリ	0	0	3	18	0	0	1	4	4	4
ヤッパリ	6	100	14	82	49	100	22	96	91	96
ヤッパシ	3	100	20	87	0	0	0	0	23	85
ヤッパ	0	0	2	66	4	100	0	0	6	60
C6 バカリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
バッカリ	3	100	1	100	1	100	0	0	5	100
D1 ノダ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ンダ	18	100	25	100	11	100	45	100	99	100
ノデワナイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ンジャンナイ	2	100	10	100	7	100	0	0	19	100
D2 モノ(ダ)	5	45	4	14	0	0	11	100	20	60
モン(ダ)	6	55	6	86	1	100	0	0	13	40
D3 NノN	1	50	8	73	2	67	3	100	13	72
NンN	1	50	3	27	1	33	0	0	5	28
D5 ワカラナイ	2	67	7	64	0	0	1	100	10	55
ワカンナイ	1	33	4	36	3	100	0	0	8	45

	K		C		M		S		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
D7 ナド	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ナンカ	13	100	24	100	2	100	14	100	53	100
D8 ナニカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ナンカ	4	100	45	100	35	100	5	100	89	100
D9 オナジ	1	100	0	0	1	14	5	100	7	54
オンナジ	0	0	0	0	6	86	0	0	6	46
D10 アマリ	0	0	8	53	3	30	6	55	17	40
アンマリ	6	100	7	47	7	70	5	45	25	60
E1 テシマウ	0	0	4	22	3	30	2	67	7	18
チャウ	16	100	14	78	7	70	1	33	38	82
E2 デワ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ジャ	3	100	1	100	7	100	14	100	25	100
デワナイ	0	0	3	40	0	0	0	0	3	7
ジャナイ	8	100	6	60	15	100	8	100	37	93
E3 テワ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
チャ	2	100	2	100	0	0	2	100	6	100
E4 ナケレバ	0	0	1	50	1	25	1	100	3	37
ナキャ	1	100	1	50	3	75	0	0	5	63
E5 レバ	3	75	2	100	0	0	4	100	9	90
リャ	1	25	0	0	0	0	0	0	1	10
E6 ア(コ)レハ	0	0	1	50	0	0	0	0	1	17
ア(コ)リャ	1	100	1	50	0	0	3	100	5	83
E7 アタシハ	4	67	14	100	3	100	2	100	23	92
アタシヤ	2	33	0	0	0	0	0	0	2	8
F1 デシヨウ	7	41	5	50	3	100	6	75	21	55
デシヨ	10	59	5	50	0	0	2	25	17	45

<表 2 - 2 > : [N家]

	Y		H		N		U		A		S		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
A1 テイル	4	9	3	8	1	4	1	2	1	3	6	12	16	8
テイル	40	91	33	92	22	96	39	98	28	97	29	83	191	92
A2 テオク	0	0	0	0	0	0	1	100	0	0	0	0	1	33
トク	1	100	0	0	1	100	0	0	0	0	0	0	2	67
B1 ケレド(モ)	5	31	0	0	2	13	0	0	2	6	21	43	30	16
ケド(モ)	11	69	55	100	13	87	22	100	33	94	28	57	162	84
C1 トイウ	1	2	4	5	1	4	4	11	0	0	14	24	24	8
ウテイウ	40	98	77	95	25	96	32	89	34	100	59	76	267	92
チュウ(ウウ)	39	98	20	83	2	67	2	33	0	0	0	0	63	72
C2 トイウ	0	0	0	0	0	0	1	11	0	0	8	67	9	8
ウテ	22	100	52	100	8	100	8	89	13	100	4	33	107	92
C3 トオモウ	5	100	17	81	3	100	8	100	12	100	12	100	57	93
ウテオモウ	0	0	4	19	0	0	0	0	0	0	0	0	4	7
C4 テモ	10	91	8	100	2	100	2	100	4	100	7	100	33	97
ウツテ	1	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3
C5 ヤハリ	0	0	1	12	0	0	7	78	0	0	0	0	8	8
ヤッバリ	40	100	7	88	6	100	2	22	14	100	19	100	88	92
ヤッパン	0	0	10	91	0	0	8	53	0	0	0	0	18	69
ヤッパ	1	100	6	46	0	0	0	0	2	100	0	0	8	50
C6 バカリ	1	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10
バツカリ	7	88	1	100	0	0	0	0	1	100	0	0	9	90
バツカシ	0	0	0	0	0	0	1	100	0	0	0	0	1	33
バツカ	0	0	2	100	0	0	0	0	0	0	0	0	2	67
D1 ノダ	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	1	1
ノダ	38	100	95	100	29	100	38	97	26	100	67	100	293	99
ノデワナイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ノジヤナイ	1	100	9	100	7	100	1	100	6	100	2	100	26	100
D2 モノ(ダ)	13	37	3	19	1	25	1	33	0	0	6	55	24	33
モン(ダ)	22	63	13	81	3	75	2	67	4	100	5	45	49	67
D3 N/N	7	70	5	71	2	100	5	83	2	100	4	100	25	81
N/N	3	30	2	29	0	0	1	17	0	0	0	0	6	19

	Y		H		N		U		A		S		計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
D4 ノデ	1	33	0	0	1	33	21	88	4	67	4	80	31	76
ンデ	2	67	1	100	2	67	2	12	2	33	1	20	10	24
D5 ワカヲナイ	4	50	0	0	1	100	0	0	3	75	3	100	11	65
ワカンナイ	4	50	14	100	0	0	1	100	1	25	0	0	20	35
ワカラン	8	67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	42
D6 テルノ	1	25	0	0	1	100	1	50	1	100	0	0	4	31
テンノ	3	75	5	100	0	0	1	50	0	0	0	0	9	69
D7 ナド	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ナンカ	3	100	13	100	0	100	2	100	3	100	11	100	32	100
D8 ナニカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ナンカ	2	100	5	100	3	100	6	100	3	100	3	100	22	100
D9 オナジ	2	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	33
オンナジ	0	0	0	0	0	0	4	100	0	0	0	0	4	67
D10 アマリ	0	0	0	0	2	29	1	50	0	0	6	50	9	21
アツマリ	5	100	7	100	5	71	1	50	9	100	6	50	33	79
E1 テシマウ	0	0	0	0	0	0	2	22	0	0	0	0	2	2
チャウ	22	100	38	100	3	100	7	78	8	100	2	100	80	98
E2 テウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ジャ	14	100	13	100	6	100	5	100	0	0	22	100	60	100
テウナイ	0	0	0	0	0	0	1	20	0	0	1	20	2	4
ジャナイ	7	100	10	100	6	100	4	80	14	100	4	80	45	96
E3 テウ	0	0	0	0	0	0	1	33	0	0	1	100	2	10
チャ	6	100	7	100	0	0	2	67	3	100	0	0	18	90
E4 ナケレバ	1	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8
ナキヤ	11	92	0	0	1	100	0	0	0	0	0	0	12	92
E5 レバ	4	40	2	100	0	0	1	100	0	0	5	100	12	67
リヤ	6	60	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	33
E6 ア(コ)レバ	2	29	0	0	0	0	1	100	0	0	1	100	4	44
ア(コ)リヤ	5	71	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	56
E7 アクシハ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
アクシヤ	2	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	100
F1 デショウ	1	5	4	14	5	50	2	17	3	37	5	63	20	24
デショ	18	95	24	86	5	50	10	83	5	63	3	37	65	76

<縮約化>については、A1の《テイル→テル》への縮約率は「老」ではS家Kが100%、N家Yが91%・Hが92%となり、「中」ではS家Cが82%、N家のNが96%・Uが98%、「若」ではS家Mが87%、N家Aが97%である。《テイル→テル》への縮約化はS、N家共三世代にあまり差がなく、定着していることが実証される。

<促音化>に関しては、まず引用の「ト」が促音化して「ッテ」となる形式を見る。C1の《トイウ→ッテイウ》への促音化率は「老」ではS家のKが95%、N家のYが98%・Hが95%とほぼ同率である。「中」ではS家のCが94%、N家のNが96%・Uが89%となっており、「若」ではS家Mが98%、N家のAが100%となり、世代差がなく高率で定着している。C2の《トイウ→ッテ》への縮約率は、「老」ではS家Kが94%、N家Y・Hが100%となっている。「中」でもS家Cが100%、N家Nが100%・Uが89%となり、「若」でもMが96%、Aが100%と三世代共高率でその差がない。しかし、C3の《ト思ウ→ッテ思ウ》への促音化を見るに、「老」においてはS家のKは0%、N家のYが0%・Hが19%と促音化率は極端に低い。「中」においてもS家のCが12%、N家のN・Uが0%となっており、「若」においてはM、A共0%である。三世代に共通して100%に近く非縮約形「ト思ウ」形式での使用が一般的である。「ト」が「思ウ」に接続した場合には三世代共殆ど促音化が起こっていない。「ト」の「ッテ」への促音化は「イウ」等の言語活動動詞に接続した場合に起こり易く、三世代共に高率での定着が実証される。

C4の《テモ→タッテ》への促音化率は、「老」ではS家Kが60%を占めるが用例数が少ないため、N家Y・Hの9%と比較できない。「中」ではS家Cが17%、N家N・Uは0%、「若」ではS、N家共0%とあるように三世代共、Kを除いては非常に低率である。

<撥音化>に関しては、D1《ノダ→ンダ》への撥音化率は、S家N家の「老」「中」「若」の三世代共100%を示している。話しことばにおいては世代の別なく「ノダ」形式は使われず、「ンダ」形式が定着していることが伺われる。

D2《モノ(ダ)→モン(ダ)》への撥音化率は、「老」ではS家Kが55%、N家Yが63%・Hが81%である。「中」ではS家Cが86%、N家Nが75%・Uが67%を示し、「若」ではS家M、N家A共に100%の高率である。「モノ(ダ)から「モン(ダ)」への撥音化率は世代が若くなるほど高くなっており、「モン(ダ)」の定着化が進んでいることを示している。D3《NノN→NンN》については、「老」ではS家Kが50%、N家Yが30%・Hが29%、「中」ではS家Cが27%、N家Nが0%・Uが17%、「若」ではS家Mが33%、N家Aが0%と低率ながら三世代の中では「老」の比率が高い。D4《ノデ→ンデ》はS家のみで用例数が少ないため、今回は分析しない。D5の《ワカラナイ→ワカンナイ》への撥音化率は、「老」ではKが33%、Yが50%・Hが100%となり、「中」ではCが36%、Nが0%・Uが100%を示し、「若」ではMが100%、Aが25%と個人差が大きく、世代差が出ない。

<拗音化>については、E1の《テシマウ→チャウ》への拗音化率は、「老」ではS家Kが100%、N家Y・H共に100%を示し、「中」ではS家Cが78%、N家Nが100%・Uが78%、「若」ではMが70%、Aが100%となっている。「チャウ」拗音化率は「老」世代の方が高率である。E2の《デワ→ジャ》の拗音化率は、S家N家の三世代共に100%となっており、「ンダ」と同様に「ジャ」も世代の別なく完全に定着していることが分かる。E3の《テワ→チャ》への撥音化率は、「老」はS家N家共に100%、「中」ではS家Cが100%、N家Uが67%、「若」ではN家Aのみだが100%となっていない。「チャ」も三世代共に高率を示しているところからその定着度が実証される。E4の《ナケレバ→ナキヤ》への拗音化率は、「老」ではS家Kが100%、N家Yが92%、「中」ではS家Cが50%、N家Nが100%、「若」ではS家Mのみだが75%となっている。採取した用例数が少ないので、比率に個人差があるが、世代別に見ると「老」の方が高率である。E5の《レバ→リャ》への拗音化率は、「老」ではS家Kが25%、N家Yが60%・Hが0%を示すが、「中」「若」ではS、N家共0%である。「レバ」形式から「リャ」形式への拗音化は「老」世代に僅かに見られるだけで、「中」「若」世代は100%「レバ」を使用し、

拗音化への移行は進んでいない。

<短音化>に関しては、F1の《デショウ→デショ》への短音化率は、S家Kが59%、N家Yが95%・Hが86%、「中」ではS家Cが50%、N家Nが50%・Uが83%、「若」ではMが0%、Aが63%となっており、「老」世代の方が短音化率が高い。

以上を丸山（1989・1990）、韓（1991）の調査した女性・男性・女子中学生の縮約率と比較して図示すると、次の<表3>のようになる。（<表3>における「老」の比率はS家C、N家Y・Hの平均値を出したものである。「中」「若」の比率も同様である。）

<表3>

	女性	男性	好中姓	老年代	中年代	若年代
(1) テイル → テル	86%	66%	98%	94%	92%	92%
	(除2例→91%)					
(2) トウ → ッテウ	76%	83%	100%	96%	89%	99%
(3) トウ → ッテ	8%	53%	100%	99%	97%	97%
(4) ノ → ソ	96%	83%	98%	86%	91%	93%
(5) テンマウ → チャウ	100%	97%	99%	100%	80%	83%
(6) テウ → ジャ	99%	98%	100%	100%	100%	100%
(7) テウ → チャ	84%	100%	100%	100%	80%	100%
(8) ナケバ → ナキヤ	93%	93%	100%	92%	67%	/

世代差と縮約形の現れ方という観点から見た場合、<表3>で明らかなように、S家N家の縮約形の使用においては「老」「中」「若」の三世代の差があまりない。つまり、最もインフォーマルな家族内での話しことばにおいては縮約形の使用に世代差がないことが分かる。

4. 縮約形とあらたまり度

本章で考察する縮約形の現れ方とあらたまり度との関連性については、世別ではなく、フォーマル・インフォーマルという観点から考察する。初対面のS（司会者）のことはややフォーマルであらたまり度がより強い、家族のことはインフォーマルであらたまり度がより弱いと捉え、両者のことを比較することによって、「あらたまり度が弱いほど縮約形が多く出現する」という仮説を検証する。〈表4〉は家族と司会者の縮約率とあらたまり度の強弱を示したものである（あらたまり度の強弱は > で示す）。

〈表4〉

	家 族 (S家N家)	司会者 (S)	あらたまり度の 強 弱
(1) テイル → テル	93 %	80 %	家族<司会者
(2) トウ → ッテウ	95 %	75 %	家族<司会者
(3) トウ → ッテ	96 %	67 %	家族<司会者
(4) ノダ→ソダ	99.7%	100 %	家族=司会者
モノ(ダ) →モノ(ダ)	68 %	29 %	家族<司会者
N/N → NソN	26 %	0 %	家族<司会者
(5) テシマウ → チヤウ	93 %	60 %	家族<司会者
(6) テウ → シヤ	100 %	100 %	家族=司会者
(7) テウ → チヤ	96 %	67 %	家族<司会者
(8) ナケレバ → ナキヤ	85 %	0 %	家族<司会者
(9) レバ → リヤ	58 %	0 %	家族<司会者
(10) テショウ → テショ	54 %	31 %	家族<司会者

<表4>に明らかのように、(4)の文末詞「ノダ」の縮約形「ンダ」と(6)の「デワ」の縮約形「ジャ」は、家族と司会者との縮約率に差がない。「ンダ」と「ジャ」は話しことばにおいてはあらたまり度に関わらず、定着していると言える。

しかしながら、その他の縮約形、即ち、(1)《テイル→テル》、(2)《トイウ→ッテイウ》、(3)《トイウ→ッテ》、(4)《モノ(ダ)→モン(ダ)》《NノN→NンN》、(5)《テシマウ→チャウ》、(7)《テワ→チャ》、(8)《ナケレバ→ナキャ》、(9)《レバ→リャ》、(10)《デショウ→デショ》は、全て家族の方が司会者より縮約率が高い。あらたまり度は司会者より家族の方が弱いわけであるから、家族の方に縮約率が高率で現れたということは、上記の仮説が実証できたことになる。つまり、縮約形(但し、「ンダ」「ジャ」を除く)は、あらたまり度が弱ければ弱いほどその縮約率が高くなると言えるのである。

5. おわりに

以上、縮約形の現れ方の実態を<縮約化><促音化><撥音化><拗音化><短音化>に類型し、中でも文末詞の《ノダ→ンダ》と《デワ→ジャ》への撥音化、拗音化の定着が顕著であることを見た。また、「ト」が「ッテ」となる促音化率は「イウ」等の言語活動動詞に接続する場合に高く、「思ウ」等の思考動詞に接続する場合は低い。縮約形の現れ方と世代差に関しては、インフォーマルな家族内においては世代差があまりないことが判明した。縮約形の現れ方とあらたまり度との関連性については、「ンダ」「ジャ」を除く縮約形はあらたまり度が弱いほど出現するという仮説が実証された。

縮約形と日本語教育との対応を考えるに、「ンダ」「ジャ(ナイ)」形式はインフォーマルな話しことばに限らず、フォーマルな話しことばにも文型項目の一つとして取り上げるべきだと考えられる。

文 献

- 井出祥子他（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』（南雲堂）
- 奥津敬一郎（1978）『「ボクハ ウナギダ」の文法ーダとノー』（くろしお出版）
- 奥津敬一郎（1986）『いわゆる日本語助詞の研究』（凡人社）
- 土岐 哲（1975）「教養番組に現れた縮約形」（『日本語教育』28号）
- 益岡隆志他（1989）『基礎日本語文法』（くろしお出版）
- 丸山和香子（1989・90）「縮約形について」（『ことば』10・11号 現代日本語研究会）
- 韓 先熙（1991）「縮約形について」（『ことば』12号 現代日本語研究会）
- 『日本語教育事典』（1982）（大坪一夫「縮約形」の項 大修館書店）
- 『日本語概説』（1989）（野沢素子「母音の脱落および縮約形」の項 桜楓社）